

## 附属中学校での実践から学ぶ音楽科内容指導論

著者	小西 潤子
雑誌名	技を媒介とした学びに熱中する子どもの育成プログラム ; 2012
ページ	77-78
発行年	2012-03-31
出版者	静岡大学教育学部
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/7209">http://hdl.handle.net/10297/7209</a>

## 附属中学校での実践から学ぶ音楽科内容指導論

音楽教育講座 小西潤子

静岡大学教育学部は中期計画・中期目標において附属学校園との連携強化を掲げている。2009年度には石井潔教育・附属学校園担当理事の提案により、教科教育教員を中心とする25名ほどの教員によって「授業研究会」を設置した。今年度は、授業研究会の活動の一環として、教育学部附属中学校の現職教員を教員免許取得のための授業「教科内容指導論」に招聘することになった。音楽教育講座では、2つの附属中学校教員から学校現場で求められる音楽教育について指導していただいた。すなわち、2012年1月23日教科内容指導論II（音楽教育・音楽文化3年）に附属静岡中学校の瀧大輔教員、同1月26日教科内容指導論I（音楽教育・音楽文化2年）に附属浜松中学校の林美奈子教員にそれぞれ依頼した。

瀧教員は、学習指導要領で掲げられている目標に到達するために、「音楽教師として心がけていること」「音楽室の環境づくり」「指導内容」「年間計画と評価」について、具体的な事例をあげて丁寧な説明をしていただいた。「心がけていること」としては、1. 音楽の楽しさを伝えるために、教師が率先して「音楽を表現する」ことで楽しい音楽活動ができる雰囲気作りをすること、2. 様々なジャンルの音楽を子どもたちに紹介し、興味関心を広げていくこと、3. 限られた時間の中で、説明を短くしてできるだけ活動の時間を多くすること、4. 生徒の意欲や関心を高めるために、多様な追及活動を出来る限り認めていくことがあげられた。これらは「説明」にとどまらず、時間の最後に瀧教員自らが編曲した《夜空のムコウ》（スガシカオ作詞、川村結花作曲）の合唱指導実践を通じて、示された。すなわち、受ける側に立った学生たちが楽しいと感じられるように、瀧教員は極めて表情豊かに合唱指揮を実践的に示したのであった。

「音楽室の環境づくり」についても、学校現場からならではの「目から鱗」の内容であった。環境が乱れていると、人間は精神的にも不安定になる。ゴミや破損のない落ち着いた教室空間を作ることは、当たり前のように地道な努力の賜物である。活動しやすい机椅子の配置を工夫したり、子どもたちの作品を掲示したりして明るい雰囲気を作り最新の音楽情報を提供することも大変重要である。機器や音楽映像資料等のソフト類が充実できればそれに越したことはないが、生徒の心をとらえ学びに専念できる場づくりにとって教員の心がけがまず問われる。これは、大学の教育研究環境整備にもそのままあてはまる。

瀧教員自身の音楽実践力強化方法についても、教員をめざす学生にとって参考になることばかりであった。音楽大学でフルートを専攻していた瀧教員にとって、吹奏楽や合唱指導は取り組みやすい内容である。しかし、さらに専門性を高めるために夏休みなど長期休業期間を利用して指揮法講習会に参加したり、箏のレッスンを受けてたりして和楽器演奏指導に役立てている。また、フルートと同類である篠笛を使った創作活動も行っている。なお、篠笛はプラスチック製のものが50本あるが、消毒をしたり男子生徒用と女子生徒用に

分けて用いたりするなどの配慮を行っているとのことであった。専門的に音楽を学んだ教員と日常生活のなかで音楽に触れているだけの生徒とでは、音楽へのアプローチが自ずと異なる。生徒の立場に立って、耳から馴染む指導の工夫なども効果的だということであった。

林教員の指導は、日常的な授業実践を学生に体験してもらうことを通じて、生徒の実情にあった教育法について考えるものであった。「世界の音楽」というテーマを設定し、「様々な国（地域）の音楽を聴く」「音楽は国（地域）によって、どんな違いがあるか？」を目標に、クイズ形式で5カ国（地域）のそれぞれ3つのジャンルの音楽を聴いて国名（地域名）をあてること、その活動をグループ活動で行うこと、これに先立って「曲の特徴」をとらえる指標を示したワークシートを作成して生徒に配布することが行われた。

選ばれた5カ国（地域）はブラジル、中国、ロシア、トルコ、アメリカで、音楽ジャンルは国歌、伝統音楽①（あまり聴いたことがない）、伝統音楽②（比較的わかりやすい）の順で提示された。国歌の大半は、近代に西洋をモデルに制定された。そのため、西洋音楽の語法にのっとしており、野外を含む式典での演奏が多いため吹奏楽編成のものが多い。したがって、国歌を聴いても多くは「民族」的な特徴を掴むことはできないのである。その点、ペントニックと西洋音階を組み合わせた《君が代》は、例外的といえる。ここで「あの国だ」と答えられるのは、「アメリカ」などよく聞く機会がある曲に限られる。そこでまず、「国際」というイメージが実は狭いことに気づかされる。また、附属浜松中学校の生徒であれば「ブラジル」も正解するかも知れない。ブラジル人居住者が多い地域性を自覚することにもつながる。伝統音楽①では見当がつかなくなったり自信が持てなくなったりした国(地域)も、伝統音楽②で確証を得ることができる。それでもわからない場合は、たとえば「ロシア」を答えさせるためにバラライカという楽器を想起させるヒントを与える。解答をし終わったら、グループの代表者が前に出てそれぞれの解答を披露する。ここでの声かけは場を盛り上げるために重要だが、下手をすると生徒のプライドを傷つけることにもなる。日常的な生徒との信頼関係が問われる場面でもある。

授業の後、学生からは「楽しかった」「短い時間で多くのことを教えること」「生徒たちに暇を与えないこと」「生徒との信頼関係を構築していくこと」「他教科との結びつきを感じたこと」「声かけ、ワークシートの作り方」など、林教員から学んだ多くのことが感想にまとめられた。実は、民族音楽学の専門的な立場からはゲーム感覚で音楽の特徴を言い当てることには抵抗感がある。しかし、偶然にもこの前日、NHKの「クローズアップ現代」というテレビ番組を通じて、ゲーム感覚を取り入れた「ゲーミフィケーション」による開発研究が様々な分野で行われていることを知り、ある段階まではある程度それが有効であることを認識していた。林教員も、同じ番組を見ていたというのである。授業の後で生徒たちに強調したことは、「当てること＝理解すること」ではないことである。ただし、当てるといふ課題によって、集中力の持続が期待できる。いかに生徒の関心を引きつつ学習効果をあげるのか、学生たちが身をもって理解する貴重な機会となった。